

江戸時代の出版物 と 装丁あれこれ

- 東海大学付属図書館第44回展示会 -



2006年5月22日～7月1日(日曜日を除く)

東海大学付属図書館

展示室(湘南校舎11号館1階)

~ 最近の展示 ~

- 2001年 6月 500年の時を超えて - 連歌師宗祇展 -
11月 松前重義博士の本棚
- グルントヴィ・内村鑑三・新渡戸稻造・松前重義博士の主な著作展 -
- 2002年 5月 書物の文化史 書物探求～文字・印刷・装丁の歴史と多様性
11月 王朝文学と音楽 - 写本によるみがえる音色 -
- 2003年 5月 TABI 大名行列から大航海時代 - 日本と世界・旅の姿 -
11月 劇作家 北條秀司
- 2004年 5月 むかしのくらし
11月 北條秀司の舞台
- 2005年 4月 歴史書は語る - ビザンツ帝国一千年の歴史と歴史書 -
6月 北欧の近代文学
11月 彩色本となった日本の古典文学 - 東海大学付属図書館蔵書展

展示にあたって

今回は付属図書館所蔵資料のなかから、「江戸時代の出版物と装丁あれこれ」をテーマとして展示会を開催いたします。

日本において書物が庶民にとって身近なものとなったのは、江戸時代になって幕藩体制が確立し、町人文化が形成されてからでした。それまで書物は貴族、僧侶、武士など特定の支配階層の人々のもので、紙そのものが貴重品だったのです。

しかし、国家を統一した徳川幕府は学問・教育の奨励に力をいれたため、文字の普及が進むとともに、紙の量産とあわせてさまざまな書物の出版が行われるようになり、やがて町人を中心とした江戸文学が形成されていきました。

当時は世界的にみても文盲率が高かったのですが、幕末に日本を訪れた西洋人は、日本の多くの庶民が読み書きをできることに驚いたといわれています。

又、西洋の書物の翻訳が始まったのも江戸時代になってからです。本展示会では杉田玄白による訳本の「解体新書」を展示しています。

尚、本展示会では日本における書物のさまざまな装丁を紹介するために、江戸時代以外に書写・出版された資料も展示しました。

書物が人々にとって身近な存在へと発展していった時代の出版物について、1人でも多くの皆様にその魅力を感じていただければ幸いです。



1. 皇朝類苑(こうちょうるいえん) / 江少虞撰

出版地・出版者不明

元和7年(1621)刊

15冊 28cm

別名「皇宋事宝類苑」。中国南宋紹興15年(1145)の類書。宋の時代の史実・逸話など1000以上の項目を諸文献から集めて種類別に編集したものである。後水尾天皇の勅命により、「紹興23年福建麻沙鎮」刊本に基づき元和7年(1621)に刊行した。元和勅版といわれている。中国ではすでに散逸しており、完全な本文を伝えるのはこの元和勅版のみである。展示資料の内題には「新雕皇朝類苑」、題簽には「皇朝類苑」とある。

2. 貞觀政要(じょうがんせいよう) / 吳兢撰

出版地・出版者不明

慶長5年(1600)刊

8冊 31cm

唐は貞觀の時代の皇帝太宗(たいそう 在位626-649)と群臣との間に行われた政治議論を40門に分類編集したもの。伏見版として最初に刊行された「孔子家語」(慶長4年(1599))に続き翌年刊行された。

3. 伊勢物語(いせものがたり)

出版地・出版者不明

慶長13年(1608)刊

2冊 27cm

嵯峨本の代表作となる出版物。木版の挿絵を入れ、色変わり料紙(いくつもの色の入った紙)を使用している。慶長13年(1608)出版後、何度も異植字版や木版印刷(整版)で増版され人気が高かった。本格的な絵入本である。平仮名交じりの古活字版。

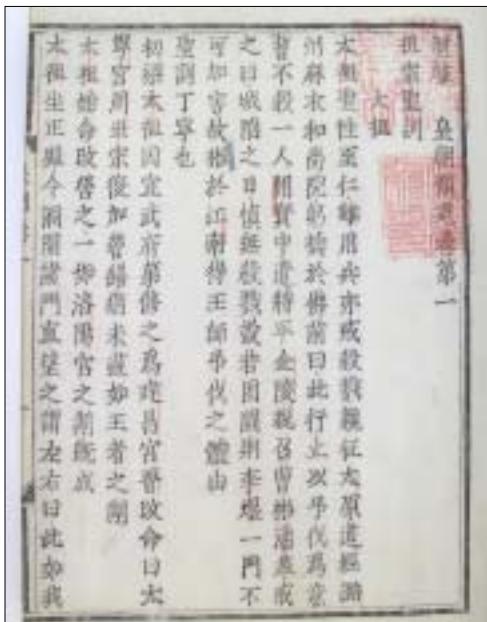
4. 梅枝(うめがえ)

出版地・出版者不明

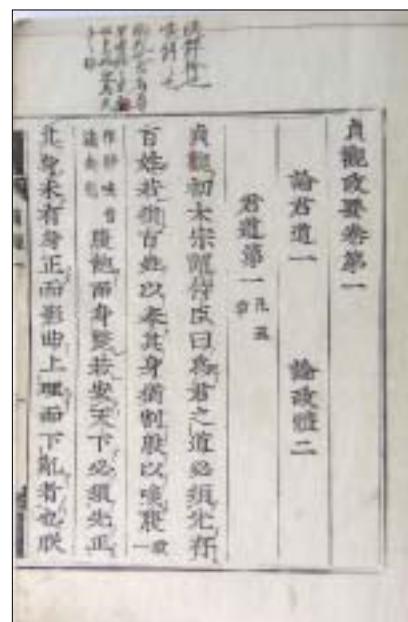
慶長(1596-1615)頃刊

10丁 24cm

「謡曲百番」の1つであり、題名は本文中の「梅が枝....」の記述による。嵯峨本。展示資料は嵯峨本の特長が良く出ていて、表紙は雲母模様で鶴の絵がほどこされている。題簽には「むめかえ」とある。平仮名交じりの古活字版。



資料1より



資料2より

5. 観心略要集(かんじんりやくようしゅう) / 源信撰

出版地・出版者不明

寛永3年(1626)刊

49丁 29cm

平安時代中期の天台宗の僧、源信(げんしん 942-1017)作。比叡山天台宗の本覚思想に包み込まれた浄土念佛論。鎌倉期以降、現実肯定の風潮に伴って、このような念佛論が一般に受け入れられていく。叡山版。

6. 天台三大部補注(てんだいさんだいぶほちゅう) / 従義撰

出版地・出版者不明

寛永3年(1626)刊

14冊 29cm

従義(じゅうぎ 1042-1091)は中国宋代の浙江省永嘉平陽の人。「天台三大部」は「法華三大部」とも呼ばれ、この資料はその注釈書である。本能寺版。

7. 秋の夜なが物がたり(あきのよながものがたり)

出版地・出版者不明

慶長・元和(1596-1624)頃刊 29丁 29cm

南北朝時代成立の稚児物語の代表作。比叡山の僧、桂海は三井寺の稚児梅若と恋仲になり、色々と事件が起きた末に梅若は自殺してしまった。これを機に桂海は京都東山に雲居寺を建てて住み瞻西(せんさい)上人と仰がれるようになった。後に梅若は観音の化身で、騒ぎは桂海や多くの人達を真の仏道へ赴かせる仏の方便であったと明かされる。展示資料は江戸後期の戯作者である柳亭種彦(りゅうていとうねひこ)の自筆の識語がある平仮名交じりの古活字版である。

8. 源氏小鏡(げんじこかがみ)

出版地・出版者不明

元和(1615-1624)頃刊

3冊 28cm

南北朝時代の成立か。源氏物語の代表的梗概書。数多くの異本、異名がある。南北朝時代以降、連歌師達の間で「源氏物語」は必須教養となり、各巻の主要な場面、筋立てがある程度習得できるように工夫された「源氏小鏡」は江戸時代まで広く利用された。平仮名交じりの古活字版。

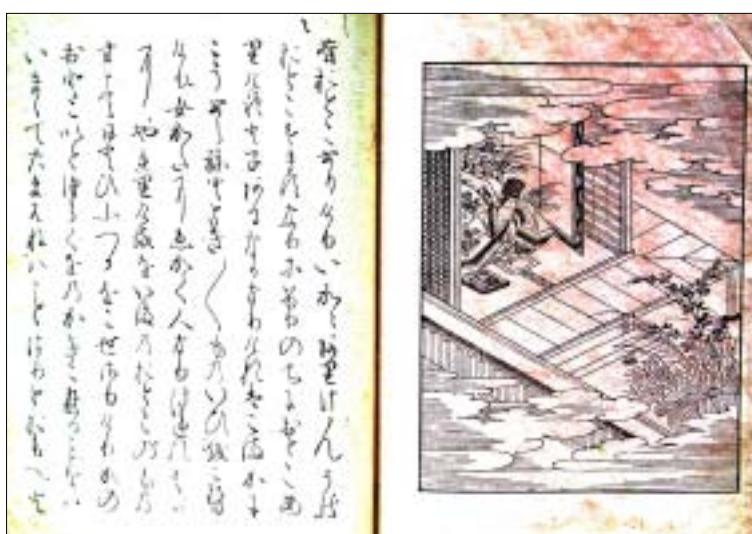
9. 新編俳韻増広事類氏族大全(しんぺんはいいんぞうこうじるいしそくたいぜん)

出版地・出版者不明

元和5年(1619)刊

9冊 27cm

別名「氏族大全」。中国の氏族に関して記した書物。町版と呼ばれる古活字版。



資料3より

10. 新撰犬筑波集(しんせんいぬつくばしゅう) / 山崎宗鑑編

出版地・出版者不明

寛永(1624-1644)頃刊 31丁 24cm

室町後期の連歌師・俳人山崎宗鑑(やまさきそうかん - 1539年頃)編。室町時代の言捨てにされていた俳諧作品を採りあげて編纂した俳諧選集。古写本は「俳諧連歌」「俳諧連歌抄」などの題名を用いていたが、連歌の「新撰菟玖波集」に対して、俳諧としての卑称の意味で「犬筑波」という名がつけられ、通称となつた。平仮名交じりの古活字版。

11. 節用集(せつようしゅう)

京都 : 平井勝左衛門休与

慶長2年(1597)刊 2巻1冊 27cm

室町中期成立の国語辞書。いろは引きの通俗辞書で、当時の日常語に関して必要に応じて語義、語源にも触れている。各種の写本、版本を生み、「節用集」という名は明治・大正期まで国語辞書の総称ともなっていた。展示資料は下巻末の刊記に「洛陽七條寺内平井勝左衛門休與開板」とある。

12. 無言抄(むごんしょう) / 木食応其編

出版地・出版者不明

元和(1615-1624)頃刊 3冊 15×21cm

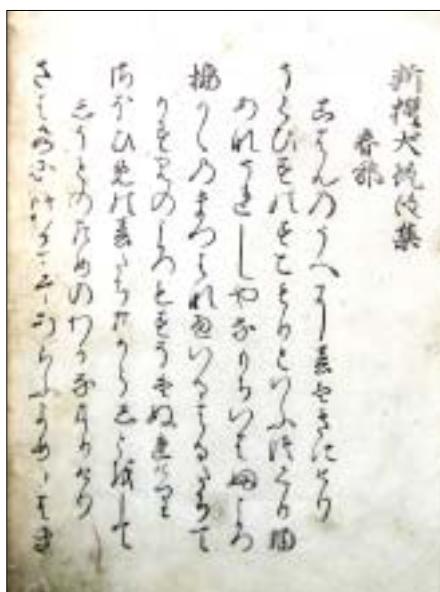
連歌。式目。安土桃山時代の真言宗の僧木食応其(もくじきおうご 1537-1608)編。跋文によると、天正7年(1579)起稿。2年余を経て脱稿した後、戦国時代の連歌師里村紹巴(さとむらじょうは 1524-1602)による数度の校閲を経て加筆修正を行い慶長2年(1597)に完成したとある。

13. 信長記(しんちょうき) / 小瀬甫庵作

出版地・出版者不明

寛永元年(1624)跋刊 8冊 31cm

軍記。織田信長の一代記。織田信長、豊臣秀吉、秀頼に仕えた安土桃山時代の武将太田牛一(おおたぎゅういち 1527-1610頃)が書いた「信長公記」を改編したものである。小瀬甫庵(おぜほあん 1564-1640)は豊臣秀次などに仕えた安土桃山・江戸初期の儒医。展示資料には巻末に「自汗集」(小瀬甫庵の政道觀を示す歌文集)あり。片仮名交じり本。



資料10より



資料11より

14. 四天王始(してんのうのはじまり)

出版地・出版者不明

宝暦・明和(1751-1772)頃刊 30丁 19cm

黒本。一般に黒本は歌舞伎・淨瑠璃の絵解き、化け物語、好色恋愛物などが多く、黄表紙などと比べると絵の割合が多い。この資料も化け物退治の話が出てくる。

15. 金咲伊達驅(こがねさくだてのくろこま) / 恋川春町縮綴；月齋画

江戸：森屋治兵衛

文化・文政(1804-1830)頃刊 2冊 18cm

恋川春町(こいかわはるまち 1744-1789)は江戸時代中期の戯作者。駿河の小島藩・松平家の江戸詰用人で、藩邸のあった小石川春日町から恋川春町という筆名を付けた。江戸での黄表紙というジャンルを形作った人といわれる。この資料は義経一代記を黄表紙にまとめたもの。

16. 鼻下長物語(はなのしたながものがたり) / 芝全交作

江戸：鶴屋喜右衛門

寛政4年(1792)刊 15丁 18cm

黄表紙。当時の子供たちの間で流行した早口言葉や、何度も繰返すうちに間違いをしてかすおかしみを題材に取り入れ大名と家臣との言葉のやり取りの面白さを描いている。

17. 嫩源氏鳴呼花表(ふたばげんじあうのふたばしら)

出版地・出版者不明

安永・天明(1772-1789)頃刊 2冊 19cm

黄表紙。赤本から合巻にうつる過程で、最初の頃は単に題名のみであった題簽も、後には展示資料15やこの資料のように絵入や彩色のものが多くなった。



資料15より



資料17より

18. 室町源氏胡蝶巻(むろまちげんじこちょうのまき) / 柳亭種彦(2世)作 ; 梅蝶樓国貞画

江戸：紅英堂

文久4年(1864)頃刊

42冊 18cm

柳亭種彦2世(りゅうとういたねひこ 1804-1868)は戯作者の柳亭種彦(1783-1842)の弟子。笠亭仙果(りゅうとうせんかく)ともいう。種彦没後、文久2年(1862)に柳亭種彦2世と正式に名乗った。この資料は全42冊という多量の合巻で、中身の絵もさることながら、色鮮やかな絵のそれぞれの表紙を合わせると1つの絵になるなど、遊び心をうかがわせる。

19. 十露盤於百掛算之一八継子立身替音頭(そろばんのおひゃくかけざんのいつはちままこだてみがわりあんど) / 山東京山作；勝川春扇画

東都：甘泉堂

文化7年(1810)刊

2冊 22cm

合巻。山東京山(さんとうきょうざん 1769-1858)は合巻作者。戯作者・浮世絵師の山東京伝(さんとうきょうでん 1761-1816)の弟。質屋の子として江戸に生まれる。兄の助力を得て処女作「復讐妹背山物語」を出し、以後死ぬまで精力的な著作活動を続けた。

20. 虚実柳巷方言(きょじつさとなまり) / 香具屋主人著

江戸：千里亭

寛政6年(1794)刊

71丁 14×20cm

洒落本。遊郭の客筋、得意芸の案内、四季の行事、遊郭内外の諸人物などが記されている。柳巷方言(さとなまり)とは遊女言葉のことである。それぞれの国訛りを改めさせるために吉原独特な言葉であった。

21. 石場妓談辰巳婦言(せきじょうぎだんたつみふげん) / 式亭三馬作；喜多川歌麿画

出版地・出版者不明

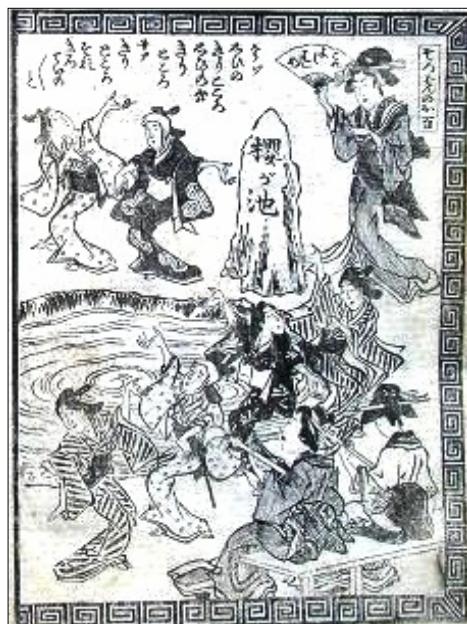
寛政10年(1798)序刊

53丁 16cm

洒落本。式亭三馬(しきていさんば 1776-1822)は江戸後期の草双紙・滑稽本作者。町人の社交場であった銭湯での庶民の会話を巧みに取り入れた「浮世風呂」「浮世床」などが代表作である。この資料は三馬の洒落本の処女作で鎌倉の遊女と客のやりとりを描いたものである。



資料18 7、8冊の表紙を並べたもの



資料19より

22. 網せ物語(えせものがたり) / 止動堂馬呑作

出版地・出版者不明

天明2年(1782)序刊

22丁 16cm

絵入洒落本。「網せ物語」は「伊勢物語」をもじった似非(えせ)物語の意味である。江戸の「おかしあとこ」が、友と伊勢参宮の帰途、古市での遊びを夢見ることを書いたもの。

23. 濡衣女鳴神(ぬれごろもおんななるかみ) / 為永瓢長, 鶴亭秀賀作 ; 歌川国貞(2世)画

江戸：辻岡屋文助

元治2-慶応3年(1865-1867)刊 5冊 18cm

草双紙。江戸後期の戯作者為永瓢長(ためながひょうちょう 生没年不明)が8編まで作したが、途中で没したため、9編より鶴亭秀賀(かくていしゅうが 生没年不明)が受け継いで書いたとされる。絵は美人画、役者絵に長じ、長編強合巻の挿絵も多く執筆した歌川国貞(2世)(うたがわくにさだ 1823-1880)。

24. 岩倉攻軍記(いわくらぜめぐんき) / 笠亭仙果(2世)作；歌川芳春画

江戸：山口屋藤兵衛

慶応3年(1867)刊

3冊 18cm

江戸の戯作者、笠亭仙果(2世)(りゅうついせんか 1837-1884)作の草双紙。

絵は江戸の浅草に住み、美人画や武者絵を描く絵師、歌川芳春(うたがわよしはる 1828-1888)。江戸時代に書かれたそれ以前の時代の軍記のひとつで、織田信長が清洲城(現在の愛知県清須市)城主であったころの戦いの様子が書かれている。

25. 桶狭間続軍記(おけはざまぞくぐんき) / 笠亭仙果(2世)作；歌川芳春画

江戸：山口屋藤兵衛

慶応3年(1867)刊

3冊 18cm

展示資料24と同時期に出版された草双紙の時代物で、作者、画ともに同じである。外題に「桶狭間軍記」とあり。織田信長に仕えていた前田犬千代(のちの前田利家)や、安土桃山時代の武将、蜂須賀小六(正勝)、佐久間盛政らが登場する。



資料24より



資料25より

26. 鶯塚梅の魁(うぐいすづかうめのさきがけ) / 松亭金水作 ; 一寿斎国政, 一耀斎芳玉画

出版地・出版者不明

嘉永3-4年(1850-1851)刊 6冊 18cm

草双紙。原作は同作者による合巻「鶯塚梅赤本」。のちに今の題名となって刊行されたものである。1編から5編は江戸末期の読本・人情本作者である松亭金水(しょうていきんすい 1797-1862)作。6編のみ泉竜亭是正(せんりゅうていこれまさ 生没年不明)によって書かれ、明治期に入ってからの刊行となった。

27. 風俗浅間嶽(ふうぞくあさまがたけ) / 柳煙亭種久, 柳水亭種清作 ; 歌川国貞(2世), 歌川国芳, 歌川芳幾画

江戸 : 和泉屋市兵衛

元治2年-慶応2年(1865-1866)刊 14冊 18cm

草双紙。江戸後期の戯作者柳亭種彦(1783-1842)の読本「浅間嶽面影草紙」を抄録して合巻とし、江戸末期の戯作者である柳煙亭種久(りゅうえんていたねひさ 生没年不明)が初編-3編、4編-14編までを戯作者で僧侶でもあった柳水亭種清(りゅうすいていたねきよ 1823-1907)が著述したものである。

28. 西鶴織留(さいかくおりとめ) / 井原西鶴著 ; 北条団水編

大阪 : 大坂書林 油屋与兵衛 : 岩国屋徳兵衛 : 大塚屋権兵衛

正徳2年(1712)刊 6冊 25cm

井原西鶴(いはらさいかく 1642-1693)著、北条団水(ほうじょうだんすい 1663-1711)編。団水は西鶴の弟子で江戸前期の浮世草子作家である。「町人鑑」、「世の人心」が収められている。江戸のさまざまな身分・職業の人心の諸相を描くが、小説としてのまとまりのない隨想的な章が多い。

29. 繪本忠臣蔵(えほんちゅうしんぐら) / 速水春暁斎作画

京都 : 菱屋孫兵衛

寛政12年-文化5年(1800-1808)10冊 22cm

前編は寛政12年(1800)刊、後編は文化5年(1808)刊。前編は山東京伝の「忠臣水滸伝」に対抗して上方書肆が出版したもので、速水春暁斎(はやみしゅんぎょうさい 生没年不明)自作画の絵本物の初作である。後編は三都書肆連盟で出版されている。赤穂義士の仇討を絵本物にした読本。

30. 敵討裏見葛葉(かたきうちうらみくずのは) / 滝沢馬琴作 ; 葛飾北斎画

江戸 : 平林庄五郎

文化4年(1807)刊 5冊 22cm

仮名草子「安倍晴明物語」や淨瑠璃「蘆屋道満大内鑑」などを素材としている信太妻(しのだづま)の伝説に基づいて構想を立てた読本である。摂津国住吉の阿倍野に住む安部保名は葛の葉という娘と出会い、結婚し童子という男の子をもうける。しかし、数年後、実の葛の葉は昔撃ち殺されており、狐が葛の葉に化けていたことが発覚する。その仇討ちに出かけ、見事に成功し、一緒に仇討ちした息子・童子は後に安倍晴明と名乗ることになった。

31. 道中膝栗毛(どうちゅうひざくりげ) / 十返舎一九作

江戸 : 梶屋喜兵衛

文化・文政(1804-1830)頃刊 10冊 18cm

「東海道中膝栗毛」ともいう。展示資料の内題は「道中膝栗毛」、題簽は「東海道中膝栗毛」。発端、初編は各1巻1冊。2編から7編までは各々上下巻合冊。ただし「5編追加」は1冊。8編は上中下巻を合冊。

弥次郎兵衛と喜多八の2人が江戸から伊勢参宮に旅立ち、道中の失敗談などが書かれている滑稽本。また、街道筋の人々の様子が狂歌を挿んで描かれている。

32. 安政五年江戸火事焼失場所絵図(あんせいごねんえどかじょうしつぱしょえず)

江戸：出版者不明

安政5年(1858)頃刊

1枚 37×42cm(折畳17×12cm)

安政5年2月10日に、日本橋小田原丁付近から出火した火事の状況を知らせる瓦版。

33. おらが春(おらがはる) / 小林一茶著

出版地・出版者不明

嘉永5年(1852)頃刊

44丁 24cm

江戸後期の俳人小林一茶(こばやしいっさ 1763-1827)著。一茶の作品の中でも晩年の円熟境を示す代表作。文政2年(1819)の元旦から歳末に至るまで、当時57歳の著者の隨想や見聞を日記体に記し、さらに四季の句作などを書き連ねた句文集である。

34. 和名類聚鈔(わみょうるいじゅしょう) / 源順著

出版地・出版者不明

元和3年(1617)序刊

9冊 27cm

源順(みなもとのしたごう 911-983)は平安時代の歌人。この資料は漢語の名詞を意味によって分類配列し、その意味を漢文で注すると共に、漢字の発音を示し、和訓(和名)が万葉仮名によって表記されている辞書である。展示資料は18巻のうち17-18巻は補写である。

35. 青楼絵本年中行事 (せいろうえほんねんじゅうぎょうじ) / 十返舎一九著；喜多川歌麿画

江戸：武田伝右衛門

明治初期(1868-1880)頃刊

2冊 23cm

吉原の年中行事や遊女品定め、遊客心得、遊郭の習慣などが載っている。題簽に「吉原青楼年中行事」とある。上総屋忠助、享和4年(1804)刊の後刷り。



資料35より

36. 絵入往来物版木(えいりおうらいものはんぎ)

1枚 21×74cm

絵入往来物の版木であるが正確な事は不明である。「天保13年」と彫られている。

37. 洛東清水寺奉額抜句上座(らくとうきよみずでらほうがくぬけくかみざ)

/ 蛙屋蛮太, 土筆新百等花評

1枚 14×49cm

城南瓶川追善のため奉納した江戸後期頃の版木である。

38. 諸國道中袖鏡(しょこくどうちゅうそでかがみ)

江戸：岡田屋嘉七

天保10年(1839)刊

64丁 11×17cm

東海道と中山道の名所旧跡、神社仏閣の案内と各駅間の里程と駄馬による運賃を記したもの。

39. 大日本沿海実測録 (だいにほんえんかいじっそくろく) / 伊能忠敬著

出版地不明：大学南校

明治3年(1870)刊

14冊 26cm

地理学者、測量家の伊能忠敬(1745-1818)が1800年から1816年にかけて全国を測量した際の記録を刊行したもの。距離の測定には歩測と間繩を併用し、方位の測定には磁針を使い、高い山の頂の方位を精密に測ることで補正を加えた。海岸測量の起点が東京の高輪の大木戸にあたる。

40. 江戸切絵図(えどきりえず)

江戸：尾張屋清七

嘉永2-安政3年(1849-1856)刊

28枚

おおむね今日の東京23区の外郭地域を除いた範囲を区分した携帯の折り畳み分冊地図である。内容は詳細に記されており実用性を重んじて作られているが、全体として見ると形状は不正確である。彩色が派手なために人目を引いた。

41. 五十三次名所圖會(ごじゅうさんつきめいしょずえ) / 歌川広重画

出版地・出版者不明

安政2年(1855)頃刊

5枚 37×26cm

江戸時代の画家、歌川広重(うたがわひろしげ 1797-1858、別名安藤広重)の画。

錦絵、合巻挿絵などを執筆していたが、天保元年(1830)頃、一幽斎号で制作した錦絵「東都名所」シリーズから風景画に開眼。保永堂・仙鶴堂合版の「東海道五拾三次」揃物錦絵を発表し、好評を得て出世作となる。今回は戸塚、藤沢、平塚、大磯、小田原を展示した。

42. 関八州全図(かんはっしゅうぜんず)

江戸：神龍堂

安政3年(1856)刊

1枚 52×69cm

関八州とは、相模、武藏、安房、上総、下総、常陸、上野、下野のこと。だいたい現在の関東地域である。旅行中の地図にも用いたと思われる。題簽に「関八州路程全図」とあり。

43. 出島阿蘭陀屋舗景(でじまおらんだやしきけい)

長崎：長崎文献社

[昭和40年]出版

1枚 45×59cm

江戸時代、出島の珍しい風景は肉筆や長崎版画として国内外に愛玩された。この資料はそれら版画のうち最も大型で、しかも内部風景にはオランダ人、丸山遊女等が点在する代表的な古版画。豊嶋屋文治衛門板(江戸末期)の版木より印刷したもの。

44. 解体新書(かいたいしんしょ) / J.A. キュルムス著；杉田玄白他訳

東京：須原屋市兵衛

安永3年(1774)刊

5冊 26cm

蘭方医、杉田玄白(すぎたげんぱく 1733-1817)と前野良沢(まえのりょうたく 1723-1803)らがドイツの医学者、J.A. Kulmus 原著のオランダ語訳医書「Tabul·anatomic·(通称ターヘル・アナトミア)」を翻訳したもの。第1冊に序図篇で内臓諸器官が図示され、第2-4冊に解説篇が全文漢文で記述されている。日本の医学に対して多大な貢献をし、広く蘭学を広めたものである。

45. 舎密開宗(せいみかいそう) / ウィリアム・ヘンリー原著；宇田川榕菴重訳増註

江戸：須原屋伊八

天保8年(1837)刊

7冊 25cm

蘭学者宇田川榕菴(うだがわようあん 1798-1846)訳著。

「舍密」はラテン語系オランダ語のchemie(化学)の音訳であり、「開宗」とはもののおおもとを啓発するの意である。イギリスの医師・化学者、William Henry の「An Epitome of Chemistry, 2nd ed. 1801」の翻訳。宇田川榕菴が翻訳した直接のテキストは、原書をJ.B. Trommsdorffが独訳増補し、さらにAdolf Ijpeij が蘭訳増補した「Chemie voor Beginnende Liefhebbers, 1803」である。ラヴォアジエ体系を基礎とする理論化学から分析化学まで詳細に記されており、単なる翻訳にとどまらず、数多くの蘭書から参考引用した詳細な著述となっている。訳語として使用されている酸素、水素など多くの用語は今日でも使われている。

46. 三兵答古知幾(さんぺいたくちき) / ハインリヒ・フォン・ブランド著、高野長英訳著

出版地不明：掃月樓

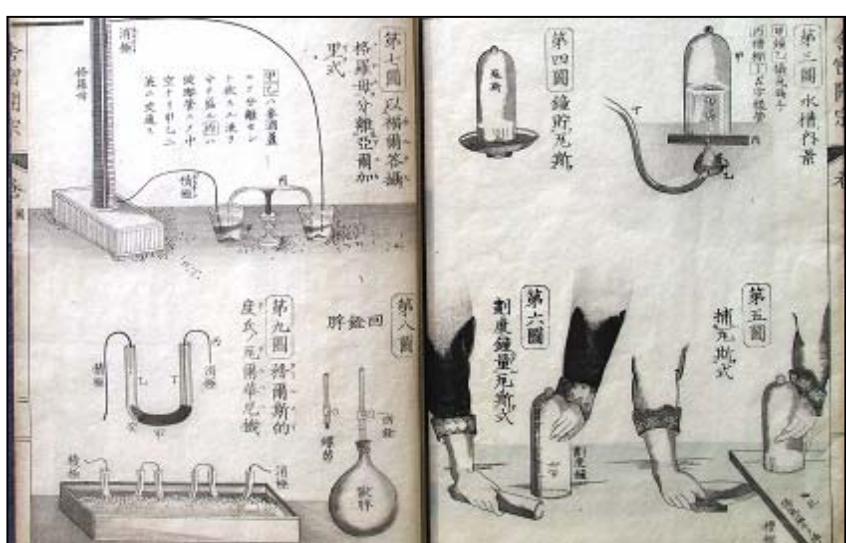
安政3年(1856)刊

9冊 26cm

訳者は幕末の蘭学者高野長英(たかのちょうえい 1804-1850)。内容は歩兵、騎兵、砲兵の用兵術を説いたもの。原書はプロシアの陸軍将校、Heinrich von Brandtの戦術書である「Grundzuge der Taktik der drei waffen, 1833」。さらにオランダ人J.J. van Mulkenが蘭訳した「Taktiek der drie wapens, 1837」を翻訳したものであり、当時のヨーロッパにおいて斬新で秀れた三兵戦術書といわれるものであった。



資料44より



資料45より

《装丁あれこれ》

47. 賦何木連歌：慶長七年九月十日(ふすなにきれんが：けいちょうしちねんくがつとうか) / 細川幽斎著

製作地・著者不明

慶長7年(1602)写

1軸 19cm

-巻子本-

木「き」を全句に読み込んだ賦物(ふしもの)連歌。慶長7年(1602)、玄旨(げんし 1534-1610 通称細川幽斎)が詠んだ連歌百韻の巻子本。玄旨は室町時代の武将、歌人、和学者で、信長・秀吉・家康に仕えた。歌人で和学者の三条西実枝(さんじょうにしさねき 1511-1579)に古今伝授を受け、近世歌学の祖といわれた。

48. [寛永三年九月六日將軍様御参内御行列次第](かんえいさんねんくがつむいかしょうぐんさまごさんだいごぎょうれつしだい)

製作地・著者不明

江戸中期(1700年代)写

1軸 29cm

-巻子本-

行列図の部分彩色。江戸幕府三代將軍、徳川家光が寛永3年(1626)に後水尾天皇の二条城行幸を迎るために、2度目の上洛をしたときの様子を記した巻子本。「寛永三年九月六日二條御城江行幸之時御樂御歌御会御解御進物之次第」を含む。

49. 成唯識論(じょうゆいしきろん)

出版地・著者不明

文永(1264-1275)頃刊

1帖 23cm

-折本-

折本。平安時代、京都における亡者供養・病者平癒・延命のための摺経の流行に起原を持つもので、法相宗の根本書である。仏教信仰は、写経の功德を説くものが中心であるが、しだいに書写を行う者が増し、摺経へと転移していった。平安時代の後半から藤原氏の氏寺興福寺とその支配下の春日社で「因明正理門論」などが次々と開版された。これらの出版物を春日版と呼んでいる。

50. 投扇興仕方(とうせんきょうしかた)

出版地・著者不明

江戸後期(1800年代)刊

1帖 16cm

-折本-

折本。「投扇興」とは、台の上に的を立て1メートルほど離れたところから開いた扇を投げてこれを落とし、的と扇の落ち具合で技の優劣を競う江戸時代の遊戯である。この資料はその説明書で、落ち具合の名称と点数が記されている。

51. 源氏物語繪(げんじものがたりえ)

製作地・著者不明

江戸後期(1800年代)刊

1帖 19cm

-折本-

源氏物語「繪合」「若紫」「朝顔」「乙女」「閑屋」「夕霧」各巻の絵を折本としたもの。展示資料は宮廷画家の土佐光信(とさみつのぶ - 1522頃)が描いた絵を下絵にして、絵師の一登斎芳綱(いとうさいよしひな 生没年不明、別名歌川芳綱)が縮図し作成したものである。

52. 法性寺殿御集(ほっしょうじどのぎょしゅう) / 藤原忠通著

東京：育徳財團

昭和12年(1937)出版

46丁 25cm

-粘葉装-

法性寺関白藤原忠通(ふじわらただみち 1097-1164)の詩集。寿永2年(1183)の古写本で尊經文庫本の複製、粘葉装。

53. 萬葉集(まんようしゅう)

東京：日本古典文学刊行会
昭和48年(1973)出版 78丁 22cm -粘葉装-
万葉集、金沢本の複製、粘葉装。

54. 伊勢物語(いせものがたり)

製作地・著者不明
室町中期(1400年代)写 88丁 21cm -列帖装-
室町時代の写本、列帖装。

55. 拾遺集(しゅういしゅう)

東京：日本古典文学刊行会
昭和49年(1974)出版 143丁 24cm -列帖装-
拾遺集、寂恵本を底本とした復刻版、列帖装。「古今集」「後撰集」に次ぐ勅撰和歌集で、三代集の一つである。

56. 伊勢物語(いせものがたり)

大阪：柏原屋與市
宝暦6年(1756)刊 2冊 27cm -袋綴-
絵入の伊勢物語、袋綴。

57. 紫式部日記(むらさきしきぶにっき) / 紫式部著

製作地・著者不明
室町中期(1400年代)写 103丁 24cm -袋綴-
「徳岡小野馬藏」印がある写本。袋綴。

58. 紫式部日記(むらさきしきぶにっき) / 紫式部著

東京：名著普及会
[昭和55年](1980)出版 2冊 28cm -袋綴-
群書類從本の複製、袋綴。

59. 伊勢物語體脳(いせものがたりずいのう) / 在原滋春著

製作地・著者不明
室町末期(1500年代)写 28丁 26cm -大和綴-
伊勢物語の注釈書、大和綴。

60. 源氏略称(げんじりやくしょう)

製作地・著者不明
江戸中期(1700年代)写 43丁 19cm -大和綴-
源氏物語の梗概書、大和綴。

61. 源氏物語抜書(げんじものがたりぬきがき)

製作地・著者不明
江戸中期(1700年代)写 126丁 18cm -大和綴-
源氏物語の要語と歌を各巻ごとに抽出したもの。大和綴。

関連語句

* 今回展示されているもの

（古活字版（こかつじばん））

近世初期の文禄・慶長・寛永期(1592-1644)を中心とした活字印刷。天皇による文禄・慶長・元和勅版。徳川家康の命による伏見版、駿河版。比叡山、高野山、本能寺などによる多くの寺院版。本阿弥光悦の嵯峨本などの私家版。営利を目的とした町版がある。

慶長勅版（けいちょうちょくはん）

後陽成天皇(1571-1617)の勅命による開版。

元和勅版（げんなちょくはん）*

後水尾天皇(1596-1680)の勅命による開版。元和7年(1621)の「皇朝類苑」をいう。

伏見版（ふしみばん）*

徳川家康が慶長4-11年(1599-1606)、京都伏見の円光寺において臨済宗の僧で足利学校主であった閑室元信(かんしつげんきつ 1548-1612)に命じて木活字を用いて出版したとされる。兵書を中心に「孔子家語」などの10種の漢籍を出版した。

駿河版（するがばん）

徳川家康が伏見版に続き、駿河(現在の静岡)に退隠後に臨済宗の僧の崇伝(すうでん 1569-1633)、儒者林羅山(1583-1657)らに命じて銅活字を用いて開版した。元和元年(1615)の「大蔵一覧集」、元和2年(1616)の「群書治要」の2種のみ。

叡山版（えいざんばん）*

比叡山延暦寺での出版。古活字版では慶長8年(1603)-寛永(1624-1644)中頃が最も盛んであった。寛永中期以降は叡山版を元にした町版での出版になっていった。

本能寺版（ほんのうじばん）*

京都の日蓮宗本能寺において慶長末年(-1615)から寛永初年(1624-)にかけ開版された。

嵯峨本（さがほん）*

慶長期(1596-1615)の後半から、国文学書を中心に、ほとんど平仮名交じりの木活字本で刊行された。京都嵯峨の学者・書家である角倉素庵(すみのくらそあん 1571-1632)が、芸術家本阿弥光悦(ほんあみこうえつ 1558-1637)らの協力を得てつくった私家版である。出版地の名をとって嵯峨本と呼ばれるが、開版者の名から角倉本、あるいは版下が光悦の筆になるものを光悦本とも呼ばれている。多くは本文用紙の厚手の楮紙に雲母を引き、または雲母模様を摺り込み、あるいは五色の紙を用い、表紙にも雲母で花鳥などの模様をあらわしたり、染色をほどこし、すぐれた彩色の挿絵を入れた美しい本である。

(草双紙・読本など)

草双紙 (くさぞうし) *

江戸時代小説の一主潮をなすもの。大衆向きに書かれた絵入の通俗小説の総称で、表紙の色によって赤本・青本・黒本・黄表紙などと呼ばれた。次に現れる合巻(ごうかん)を含めて、草双紙と呼んだ。

赤本 (あかほん)

延宝から寛延(1673-1751)頃に出版された草双紙の一様式をいう。子供向けの御伽噺(おとぎばなし)を題材とした、絵を主としたものが主流だった。紙質も悪く読み捨てのものだった。

黒本 (くろほん) *

寛延(1748-1751)から安永3年(1774)頃の草双紙の一様式をいい、表紙が墨によって黒色に色付けされていた。赤本について刊行された。同時期に表紙が萌黄色の青本も刊行されており、黒本は青本の再販本との見解がある。歌舞伎、淨瑠璃の絵解き、英雄一代記、化物語、好色恋愛物等の内容が赤本時代のものに加わり大人向けの読み物へと移行していった。

黄表紙 (きびょうし) *

安永4年(1775)から文化3年(1806)頃、江戸時代中期以後数多く出版された草双紙の一様式をいう。草双紙の青本のあとを受けて、表紙が萌黄色からより安価な顔料を用いた黄色へと変化していくため、黄表紙と称された。内容は当世の世相、風俗、事件などを流行語を交えて写実的に描写すると共に、ことさらに常識に反し理屈を排除して荒唐無稽な構想・表現による滑稽をもっぱら狙ったもの。「通」と「無駄」すなわち洒落と機知によるおかしさをねらった、成人の漫画ともいいくべき作風がうちたてられた。

読本 (よみほん) *

赤本などの絵草紙に対して、文章を旨とする本の意。寛延、宝暦の頃(1748-1764)からのもの。洒落本などの淫猥な小説本の発売禁止にあった作者たちが、新天地を求めた結果生まれ出たもので、読み物を主とした。挿絵は人物の肖像など2~3枚を入れた程度で、怪談ものか中国の翻訳ものや、わが国の奇談・伝説を材料にとり、半紙判の5冊ものが多い。

洒落本 (しゃれほん) *

江戸時代の小説形態の一種。享保(1716-1736)後半から始まり、文政(1818-1830)頃までに多く刊行された、遊里に取材する短編の小冊子(小本【こほん】)。遊客遊女などの姿態言動を、会話を主とした文章で写実的に描き、簡単な小説的構成をとるものが多い。

滑稽本 (こっけいほん) *

「道中膝栗毛」などにより確立された小説の一種。享和から文政(1801-1830)頃に流行した。洒落本の写実的なところを継承しつつ庶民の失敗談などを描き、軽妙な笑いを誘う読み物であった。文体は人物の口ぶりを描写した対話文が中心となっている。

合巻 (ごうかん) *

文化(1804-1818)以降の江戸時代後期に流行した草双紙の一様式。読み物が長編になってきたため、それまで5丁を1巻とした薄い作りだったものを数巻を合わせ1冊にまとめるようになった。絵を主とした読み物で内容は仇討ち物、お家騒動物、歌舞伎物、中国小説・日本古典翻案物などである。装丁は錦絵摺付表紙など浮世絵版画の技術を駆使するなど、黄表紙が漉き返しの安い紙を本文に使っていたものに比べると、絵や色彩が芸術的になつた。

瓦版 (かわらばん) *

現代の新聞の号外のようなもので、ニュース性に富むさまざまな情報が報道された。ただし、全部が全部事実を伝えたとは限らない。より多く売るために内容を歪曲させ買ったものもある。瓦版の名称は粘土に文字や絵画などを彫って瓦のように焼いて原版を作ったところに由来する。当時は読売(よみうり)、または辻売り絵双紙とも呼ばれていた。

(装丁あれこれ)

巻子本 (かんすばん) *

横に長くて軸に巻いた「巻物」のこと。書物の装丁としては最も古い形式で、東洋・西洋ともに行われた。日本には奈良時代に中国から伝わり、当時の絵巻や経巻などにその形が残っている。見たいところがすぐに見られないという欠点があった。縦に巻く掛軸も巻子本の変形といえる。

折本 (おりほん) *

古くは巻子本から変形したもの。巻子本は開閉に不便なので、それを避けるため一定の幅で折りたたみ、屏風のように前後に折って冊子の形としたもの。巻子本より利用しやすくなつたが、何度も繰り返し利用すると折り目が切れてしまうことがあった。日本には平安時代に中国から伝わった。

粘葉装 (でっちょうそう) *

折本の欠点を補うために考案された。用紙を1枚ごとに二つ折にして、折り目(外側)に沿つて5mmほど糊付けして重ねて貼り合わせ、表紙をつけて冊子としたもの。糊を用いて各葉を綴じつけるので粘葉と言う。厚い本には向かず、利用が多いと糊の部分が剥がれてしまふらになつてしまうというのが欠点であった。本を開くと蝶の羽が開くように見えるため蝶装(こちょうそう)とも言われる。

列帖装 (れっちょうそう) *

粘葉装の欠点を補うために生まれた方法。用紙を数枚重ねて二つ折にし、糊付けをするのではなく二折以上を糸でかがつたもの。綴葉装(てっちょうそう・てつようそう)ともいわれる。

袋綴 (ふくろとじ) *

表面(書写面・印刷面)が外側に、裏面(白)が内側になるように折り込み、折り目とは反対側の用紙合わせ目に沿つて、上下2ヶ所をこよりで綴じたもの。形態的には1紙1紙が底抜けの袋状になるところから袋綴と呼ばれている。したがつて粘葉装とは用紙の折り方、接合部が逆になる。綴じ目は4つ目か5つ目が通例で、4つ目は中国風、5つ目は朝鮮風である。

大和綴 (やまととじ) *

平安末期から行われた装丁で、用紙を折らずに重ねて穴をあけ、細紐を通して綴じたもの。写本や大福帳に用いられることが多かった。列帖装・綴葉装を大和綴と称した例も多い。



資料22より

参考文献

- ◆ 「日本古典文学大辞典」 日本古典文学大辞典編集委員会編 岩波書店 , 1983-1986
- ◆ 「日本古典書誌学総説」 藤井隆著 和泉書院 , 1991
- ◆ 「古本用語事典」 久源太郎著 有精堂出版 , 1989
- ◆ 「和本入門：千年生きる書物の世界」 橋口候之介著 平凡社 , 2005
- ◆ 「日本書誌学を学ぶ人のために」 廣庭基介, 長友千代治著 世界思想社 , 1998
- ◆ 「江戸の板本：書誌学談義」 中野三敏著 岩波書店 , 1995
- ◆ 「ビジュアル・ワイド江戸時代館」 大石学, 小澤弘, 山本博文編集委員 小学館 , 2002
- ◆ 「日本古典籍書誌学辞典」 井上宗雄ほか編著 岩波書店 , 1999
- ◆ 「古活字版之研究」 川瀬一馬著 Antiquarian Booksellers Association of Japan , 1967
- ◆ 「国書人名辞典」 市古貞次ほか編 岩波書店 , 1993-1996
- ◆ 「日本書誌学大系 67-3～67-5」 近世文学読書会編 青裳堂書店 , 2000-2001
- ◆ 「戦国人名事典」 阿部猛 , 西村圭子編 新人物往来社 , 1987
- ◆ 「書誌学：古文献資料に親しむ」 杉浦克己著 放送大学教育振興会 , 1999
- ◆ 「源氏物語事典」 池田亀鑑編 東京堂出版 , 1960
- ◆ 「洋学史事典」 日蘭学会編 雄松堂出版 , 1984

発行日 2006年5月22日
印 刷 教育支援センター 印刷業務課
発行所 東海大学付属図書館
〒259-1292 平塚市北金目1117
TEL 0463-58-1211 (代)

<http://www.time.u-tokai.ac.jp/>



「北斎漫画」より